

自然主義的ヒウマニズムの宗教批判

河 村 巖

ヒウマニズムというのは人間主義であつて、人間そのものへの深く強い關心と愛とを基盤とする思想或はむしろ生き方である。それは時代と環境に即して様々な形態をとつて現はれた。ギリシアにおいては人間性の總括たる圓満調和の思想として現れた。近代ルネサンスのヒウマニズムは普通に人文主義と呼ばれる。人文 (Humanitas) とは人間的な典籍 (Litterae humaniores) を意味し、キリスト教の聖經に對して、ギリシヤ・ローマの異教の古典を指したものである。この古典文化の理想を取戻し、人間解放の模範として、中世の教會の教權や教理から人間を解放する運動となつた。當時の宗教に對してしばしば反對もしたが、之に對する關心もあつた。ペーコンが自然を力説し「經驗的科學のみが自然による影響を完全に確証し得る」と主張したけれども、宗教に反對の意識はみえず、かへつて信仰を持つところのみられる。ニコラス・クザヌスは經驗と推理とでは神を知ることが不可能である。直觀即ちあらゆる知的なるものが消滅した状態に於て始めて知ることができるといふ二つの領域—外的で自然律に従う理性認識

が可能な領域と他は內的で自然律に従わない理性を超越する領域とを認めているのである。次に市民的ヒウマニズムは中世末紀の貴族、商人によつて抑壓された農民・小工業者・職人等の生産者がその担手であつた。カトリック教徒も加つていたが主としてプロテスタント主義に屬していた中産的生產階であつた。宗教改革者達が説いたあの預定説の怖るべき必然が基督者としての自由の確立に導き正統的キリスト教信仰の強き支柱となつた。アメリカ大陸を顧るところでは約三世紀間にわたつて正統的キリスト教の超自然主義反ヒウマニズムの思想が優位を占めていた。その中にはプロテスタント主義の神學思想もカトリック主義の神學思想も數えられる。十九世紀に於ては歐洲大陸の影響殊にカントやヘーゲルの理想主義・先驗哲學の影響が著しかつた。その他に近代自然科學の發達・ダーウインの進化論・近代産業等の影響とアメリカ人の行動的科學的氣質と合してキリスト教が著しく近代化した。それは宗教思想の方面では自由主義キリスト教となり、哲學思想ではプラグマチズムやヒウマニズムの諸潮流となつた。自由主義キリスト教は科學的方法をキリスト教のあらゆる問題に適用し、著しく現在の活ける靈的經驗に興味をもつ內在的倫理的宗教思想であつ

て正統的キリスト教に比して著しく近代化した思想である。ブラクマチイズムはチャイルズ・ピアード・ジエームズ、デューワイ等によつて組織されたアメリカの經驗乃至氣分と不可分離な哲學思想である。この國のヒウマニズムには種々の潮流が見受けられる。宗教的ヒウマニズム、アメリカ倫理文化協會、自由思想家達を數えられるがモリス・コーエン、フデリリツク・ウツドブライヂ、ジョン・デューワイ等によつて組織されエドマン・ランダル、シユナイダーによつて後繼されてるものが有力であつて、自然主義的ヒウマニズムと呼ばれてゐる。自由主義的キリスト教、ブラクマチイズム、ヒウマニズムは悉く宗教をば人間のために考察する。宗教を超經驗の側面から取扱はないで人間の側から取扱ふ。その結果ときに宗教を解消に至らしめるものもある。

宗教の近代化は現在では鋭く批判をうけている。既に古くはキエルケゴールはヘーゲル哲學及びその宗教思想の限界を批判した。ルドルフ・オットーには近代的色彩が残つてゐるが、宗教を「全き他者」の領域に定位し、パウル・チリツヒは「宗教概念の克服」に於て宗教を無制約者として文化の彼岸たる實在領域に定礎する。キエルケゴールの影響をうけて弁証法神學者、カール・バルト、エミル・ブルンナーも従來の宗教哲學・神學思想が人間中心主義的であり、理性中心主義的であつたに對して、神中心主義的啓示中心主義思想を主張している。弁証法神學の宗教思想は宗教哲學神學に於けるコペルニクスの革命と言はれてゐる。ネオ・オルソドキシヤと言はれるニーバーの宗教

思想も宗教を超越の領域に定位し、彼岸化した近代宗教思想の克服を試みる一つの強力なる思想である。ともかく現在に「冷たい競争」が行はれてゐるようには、宗教思想界に於ても宗教の此岸化彼岸化の對立が進捗しつゝあると言へるのである。

我々はこの小論で自然主義的ヒウマニズムの哲學が宗教に對する思想・態度を批判検討する積りである。ヒウマニズムの思想は長い歴史を有し人間とか自然を中心とする思想と言へば一應は共通してゐるが時代と環境とによつて力点が異つてゐる。均衡のとれた生活、古典の研究、宗教からの解放、人生の全面的享樂、人間中心の哲學等様々の内容をもつてゐる自然主義的ヒウマニズムは現代アメリカ合衆國の資本主義的繁榮を時代と環境とするうちに主張されてゐるヒウマニズムの一潮流である。コリス・ラーモントはこの二十世紀のヒウマニズムを最も簡明に述べるとそれは「この自然的世界に於いて理性と民主主義との諸方法によつて、凡ての人々のより大なる善に喜んで奉仕する一つの哲學である」と。一般にヒウマニズムは所謂哲學を専門とする人々だけの哲學ではない。幸福にして有益なる生活を送らんとする人々に對する一つの考へ方であり、行動の仕方を言うのであつて、偉大なる獨創性を主張し知識人に訴へたり、現實の世界或ひはある超自然的夢幻の世界に我々の欲望の達成を公約しもつて大衆に訴へるといふ哲學ではない。人間性の種々の面を顧慮する。たとへ理性の方法によつて眞善美の最後の判定を下すとはいへ、人間の感情的側面にも活動する余地を残して置くのである。又特に「自然主義的」といふ形容

詞が冠せられている譯は、その世界觀では自然が何よりも重んぜられ超自然は全く容れる余地がなく、そこではまた人が自然の必須の要素をなして、自然と人とを鋭く切り離すことができないことを意味しているためである。

自然主義的ヒウマニズムの地位を明らかにし且つ他の哲學思想と相違する諸点は何んであるか、ラーモントが「哲學としてのヒウマニズム」で擧げているところは次の八つである。これらの八要綱は自然主義的ヒウマニズムが宗教や宗教的道德思想を批判する基準にもなつていたのである。

(一) 自然主義的ヒウマニズムは自然主義的宇宙觀或ひは形而上學を信じて、あらゆる超自然的要素を排除し、自然をば存在の全体と考へ、これは心とか意識から全く獨立し、斷えず變化しつゝある存在と考へる。

(二) 自然主義ヒウマニズムの人間觀は科學的証明を経た事實に基いて構成される。人間は大自然の一部分であり、身体と精神との兩者を具えているが、兩者は不可分離に統一されている。従つて肉体の死後にも精神が存続するとは信じられない。

(三) 自然主義ヒウマニズムは傳統的宗教思想と異り、思惟作用の優越性を否定する。これは歩行・呼吸と同じで自然の働きであり、頭腦の機能と不可分離に結合している。その産物である觀念は人という複雑なる有機生活体が人の置かれた環境との相互作用から生ずるものであつて、どこが別な個處に人から離れて獨立に存在するもの

ない。

(四) 人は科學と理性との力を用いて斷えず認識を増加し又之を使用し自己に關係する諸問題を解決してゆく力をもつ存在者である。

(五) 自然主義的ヒウマニズムは一般予定説、決定論、運命觀に反對であつて、人はある範圍まで創造的活動をなしうる自由なる主体であつて自己の運命の支配者、開拓者である。

(六) 人間のあらゆる價值をこの人世の經驗と關係とに基づける倫理或ひは道德を信じ、國民、民族、宗教の差別を超越してどんな人々にも此人生の幸福、自由と進歩—經濟的、文化的、宗教的意味—を達成せしめるために人々が忠誠をささげる最大原理と考へる。

(七) 藝術と外的自然の觀賞等美の認識の最大可能なる發展を主張し、これ生活内に普及せしめんとする。

(八) 國民的又は國際的である協同的經濟的秩序に基づいて、民主主義と平和の世界の建設を目的とする遠大なる社會的計劃を主張する。この八つの特徴を主義とする自然主義的ヒウマニズムは現代アメリカの經濟・思想・宗教を背景とすることは明らかに觀取される。このヒウマニズムは又科學的方法をもつて哲學をするから科學的自然主義とも、又世俗的生活に重きを置く点から世俗的ヒウマニズムとも、自然に立つから自然主義的ヒウマニズムとも、デモクラシーを力説するから民主主義的ヒウマニズムとも名づけられる。

以上叙述したように自然主義的ヒウマニズムは神に代るに自然をもつて究竟的實在と考へ、これに基く宇宙觀・人間觀・歴史觀・道德

説を主張し、超自然的諸要素と宗教を排撃する哲學思想であり、生活法である。このヒウマニズムが宗教及びそれに基づく道徳を排撃する論據を宇宙觀、認識論、倫理の三領域に亘つて尋ねてみたいのである。

二

自然主義的ヒウマニズムは先づ何を宗教と考へているか。その説く宗教の最少定義によると「何らかの意味で超自然的諸要素、諸力、諸状態に祈願し依屬し信仰する人の働き」を宗教と呼んでゐる。ここからして自然主義的ヒウマニズムが宗教批判のうちに予想しておる超自然的なるものをもつ宗教思想とは、アメリカ合衆國に現存する傳統的キリスト教、カント、ヘーゲルに影響された宗教哲學思想、創發的進化的による新有神論である。傳統的キリスト教の説く宗教思想によると、神は超越的存在者にして宇宙の創造者維持者であり、人は神によつて創造されたが、アダムの犯した罪、所謂原罪に依つて苦しむ、神はこの人類の状況をあわれみ、キリスト・イエスを此世に遣して、處女マリヤより生れしめ、十字架の苦をうけて人類の罪を贖ひ、三日目に復活して弟子達に現れて後昇天し、歴史の終りに再び此世に來りて世界を審判するという一大宗教劇の内容をもつもので基督者の常識となつてゐるものである。これらの内容が神學的思索による精練を加へられ各宗各派獨自の神學思想となつてゐる。古くは神學は宇宙論、人間論、救濟論、教會論、終末論という様に説かれた。學的認識の相違

によつて順次は種々の變更をうけた。その中に意味されてゐる道徳思想はビュリタンの禁欲的倫理觀を産み、又その超越的神觀から生じたカルヴィン主義キリスト教の予定説は、近代資本主義の發展とも關聯のある有力な宗教思想である。又カントは理性の先驗的方則によつて現象界の構成を明らかにし、從來の思弁的理性による神の存在の論證を本体論的證明、宇宙論的證明、自然神學的(目的論的)證明の三つに綜括してその欠陥を指摘し、新らたな道徳的の神の証明を論じて道徳の世界に於て宗教の眞理を立証せんとした。カントの倫理は形式主義と云われ、行爲の結果が問題でなく、善良なる意志そのものが問題であつた。現實は徳に相應じた福が與えられるほど合理的世界ではない。徳と福との一致は感性的なる現世に於てではなく、無限の彼岸に於てはじめて可能となるものでなくてはならない。又ヘーゲルは「精神的なるものは實在的なるもの、實在的なるものは精神的なるもの」として絶對的觀念論を説き弁証法によつて展開した。更に又現代の發達した自然科学的成果を顧慮したてられたアレキサンダーの新實在論、ホワイトヘッドのオルガニズムの哲學など超自然的先驗的絶對的要素をふくむ主張は自然主義的ヒウマニズムの批判の對象となつてゐる。自然主義的ヒウマニズムは自然肯定禮讚の積極的哲學である。此世を火宅と觀じ神と彼岸と不死とに生の希望をつなぐ宗教思想は消極的として自然的ヒウマニズムの好まざる處である。そのヒウマニズムの宇宙觀又は形而上學は近代科學の諸事實と諸關係に基づいて宗教的藝術的天才の所説も顧慮し、從來の超自然的擬人的見解を排除して構成

された内在的宇宙観である。「實在の總計」をば自然と呼び、それを構成する成素には多種多様な形態が考へられるが斷えず變化しつゝあるもので、これを物質と呼んでいる。物質とはここでは一般概念に過ぎず、その「究極の成素」に關しては科學の進歩に伴うて變化をうける。客觀的實在、物質、實體、出來事、電子其の他なんと呼ばれようと、常に心、意識、神意などは獨立せるものと主張する。自然科学的實証主義にたつ自然主義的ヒウマニズムでは物質を基底とする自然以外の實在は認められない。又自然は時間的空間的にも廣大無邊であるので自然を超越する神を悟り得ないという。

又正統派的神學思想ではその超越的神は特に人間の救ひを顧る愛の神という信仰である。自然主義的ヒウマニズムは自然は人其の他の被造物に向つて偏愛を示さない。ホモ・サピエンスに關心がないと同様に生の如何なる形にも關心を現はさない。海、星、分子、其他無生物界の現象にも生物界の現象に對すると同様に關心をもたない。しかしながら人は人の目的に應ずるように自然を利用することができる。自然は地震、火山の爆發等で人類を害することもあるが、近來は自然の爆發を利用し、地震を予知するに至つた。自然は人類の生活に利害を加へようとする予期も意志もなく全く無關心ではあるが、人類は之を自己の種々の進化と地球の征服に用いることができる。

又傳統的神學では愛にして全智全能なる神がどうして此世界に不幸害惡墮落の多い世界を創造したかということが問題であり、このために原罪説、人類墮落説、惡魔存在論を想定してその解決を試みた。こ

の惡の導入は、惡が事物の構成に重要な役割をもつことにもなり、又惡を人間の迷妄と斷じ得なくなり、假想的善と考へるようになる。自然的ヒウマニズムは神の存在と切り離して之を人間の生活との關連に於て考察する。人類の安寧幸福を邪げ害するときに惡となる。多くの惡は人間が造つたものであり、あらゆる惡は人間が解決すべきである。人との關連に於て考へるべき惡を宇宙との關連に於て考へることその事が惡であると傳統的神學思想を非難するのである。

惡に關連して苦痛の問題がある。傳統的神學では苦痛の存在を神の正義と愛とに關係してその存在を解釋する。自然主義的ヒウマニズムはこの問題も超自然的存在者と關連せず、生物學と心理學から解釋し生物に苦痛感のあるのは生命の維持のために必要であり、健康と生命の危機をさける警告であると考へる。

神の存在の本体論的証明は神の概念そのものから神の存在を証明しようとするものである。カントはこの証明の成立しえないことを論じた。それは論理的述語と實在的述語との區別を無視しているのである。自然主義的ヒウマニストも觀念の實在を否定するので觀念としての神を實在するは謬りであるといふ。神の存在の宇宙論的証明と云われているものは、世界の存在からその創始者を推論しようとするものである。ヒウマニストは原因から原因へと全系列の盡きるところまで遡つて究極の原因がなければならぬとするのは論理的必然性を欠く。究極の必然的存在があるべきだとしてもそれが現に存在すると主張することはできない。宇宙とか自然自体を永遠的存在と考へる方が論理

的に理解し易い。創造者或は第一原因としての超自然的神を要請することは神を永遠の存在者とし又永遠に存在する實在を想定することである。これは宇宙が永遠なる存在でないといふ理由に満足を與へるために案出された論証であるという。自然神學的(目的論的)証明は、世界の秩序や合目的性から全智の世界建築者たる神を推論しようとする。自然主義的ヒュマニストは目的的存在を認めない。目的と云われているものは、ある一定の段階に到達した物質に潜在的にある諸性質が常に存するかのように考へるから生じたものである。人間の形に組織されたときの潜在的諸性質を考へて、それを逆に遡つて宇宙の原本的構成として讀むに過ぎないというのである。しかし自然主義を奉ずる學者例へばブラットの如きは、モルガン等の創發進化論の立場に立ち目的の客觀性を認め宇宙間事物の發達の諸段階に目的を考へざるを得ないという論者もある。

神の論証には常に難点が伴う。妥當であるとしてもそれが宗教經驗でいう神と同一であるかどうかは考察を必要とするのである。これらの論証の神は宗教經驗の裏付けによつて宗教性を得るのであると考へられる。自然主義的ヒュマニズムは「實在の總計」としての自然以外の實在を認めず又この自然は自然科学的方法による客觀的自然に限定されている。現代科學の進歩は自然科学的宇宙概念と價值的宇宙概念、宗教的宇宙神概念が相寄り相補うことによつて實在の真相に近づくのたと云われている。

傳統的神學の人間觀によると人は精神と身体との二元より成る。主

觀的觀念論では個人の意識によつて對象が構成されるとすれば物も心の產物となり、遂には獨我論となる。客觀的觀念論は宇宙全体を神意識の中に存在すると考へる、共に心或ひは意識に重きを置き之を宇宙に歸屬せしめる擬人的哲學だとする。精神と身体との二元論が主觀の側を神化し「超自然的宗教の避難處」たらしめる。人は身体を離れて精神はなく、精神を離れては身体がない。相則不離の關係にある一元的のものである。又思惟作用も人や自然に於ける他の過程と異るとこのないものである。理性を高く評價し宇宙原理と見做すと最高の睿智的存在者が宇宙を導きつゝあるといふ妄想を起す。これはもとく自然の水準にあるものを自然以上とするから起す謬りである。精神とは一定の複雑な形式で組織化された生物のもつ機能であつて、自然の中にある活動で、これをその活動を超えて精神の機能の焦点を擴大するのは謬りである。思惟作用というものは大脳皮質の活動で我々に與へられた種々の經驗内容間の諸關係を思惟することによつて統一的に内容間の組織化が行はれてゆく。ここに宗教經驗と思惟作用との關係が考へられなければならない。

三

神が存在するかどうかの問題に就いて自然主義的ヒュマニズムはこれを否定する我々は宗教經驗にかえることを主張する。次に體驗した神をどうして認識し得られるか、神認識の源はどこにあるか。從來から神認識の方法は、大別すると次の五つ、即ち權威、啓示、直觀、合理主

義科學的方法が擧げられる。自然主義的ヒウマニズムは以上の認識方法を検討する。傳統的宗教の神の認識は超自然的啓示に基いている。

即ち予言者とか宗教指導者が神の言葉を直接に受取つて、それを絶對的不變の眞理として人々に傳える。啓示は祈禱・卜筮・呪術・觀相術等が媒介となることもあり、又神秘家の体験によることもある。神秘

家は自分の体験に於いて神或ひは世界靈に、超理性的又は超感覺的な恍惚狀態、幻想、直觀の方法によつて、接觸する。所謂神秘的合一狀態である。自然主義的ヒウマニストは啓示は超感覺的超理性的のもでなく、自然的狀態に過ぎない。こんな狀態は癲癇、ヒステリ、神經衰弱、性的感情の不満から惹起されるものであり、又恍惚狀態は藥物、瓦斯、酒精などによつても亦斷食、鞭打、舞蹈によつても生ず。

正常の人にあつても交響樂・詩文・自然美・愛等に深く影響されるときにも起る。従つて決して超自然的なものでなく、單なる自然的經驗に過ぎない。又超越的神との交り、他界との交通とか云う意義をも認めない。又自然主義的ヒウマニストに依ると啓示に基づく認識には二つの前提がある。(一)は人の中に超自然的認識能力があるということ(二)は至上的存在者が人間の諸問題に親しい關心を有ち、諸問題を熟知してゐるといふ前提である。(一)の思想は古代からの二元的心理學と超自然的靈魂説に基いておつて、身心一元論と自然主義認識論を奉ずる自然主義的認識論の立場からは到底認めることができないというのである。(二)は宗教的先達の影響によるものである。自然主義的ヒウマニズムにとつてどんな觀念も觀念群も直接な認識狀態から得ることはでき

ない。科學的認識過程は、觀察・反省・實驗・吟味という時間と勞苦を経なければならぬ。どんな直觀洞察もそれが徹底的に確証されるまでは信ずることは不可能であると主張するのである。啓示の認識論的價值に關しては論議が盡されなければならないが、これは宗教的意義の把握にあると考へられるであらう。

次は直覺であるがこれは宗教体験、神秘的啓示と極めて密接な關係がある。特に哲學に於いて高く評價されている。少しも推理過程を経ずに直ちに直接確實な眞理を認知する方法と云われている。自然主義ヒウマニズムはこの種の能力をもつ人々を否定しないが、單に極めて微少な感覺知覺を指すか、又異常なる速度で與へられた狀況を洞察する思考作用であつて、特に婦人に多く見られる現象である。以上は自然主義的ヒウマニズムの直覺説であるが多分に心理學的作用に重きを置かれて認識論的意義が稀薄のように感ぜられる。直覺は全体を知る働きとも云われる。科學に於いても全体を知る作用が行はれるが主として部分的認識である。チャーレス・ベネットが全体作用の特徴として擧げるところによると(一)直覺の働きに於ては我々の心は全体を認知するのであつて、共觀的であり、分析的でない。(二)その認識は容易に概念化され得(三)全体作用と部分作用とが相互に他を欠いてはならない。認識とは両者が調和的に結合したものであると云うている。最も普通の意味では直覺は單に直接な知覺を指すが、宗教的認識に於ては全体として事物を経験するときに究極の意味・關係・價值を認識すること、單なる觀でなく「洞觀」であると云われる。自然主義的ヒウマニズ

ムの心理分析が示すように感覺や理性經驗と離れることはないが、即ち認識の部分作用と結合しているが、それらの中に示される意味をみるのであつて、この意味の肯定は認が信仰と云われるものである。

自然主義的ヒウマニズムは宗教的認識に於いて教權の占める地位を許さない。それは認識を悉く經驗と理性とから得ようとする。教權の意味は全く失はれてしまうだらうか、教權による認識は決して單に過去に出來た教義を盲目的に受人れるといふのではなく、教權には現在の中に過去が生き、過去に得た遺生で將來の進歩に可能なるものが認められるという事である。過去が現在に生きてそこに内的な確信が生れ精神の批判に堪え得て實際の宗教生活に宗教的實証を與へるのが教權である。それで教權は絶対的のものでないけれども道具的價值をもつものであることは認めなければならぬ。

次に合理主義の認識である。この合理主義は數學的或ひは論理的前提から出發し、嚴密なる演繹によつて緊密に相互に統合した複合觀念を作り上げて一つの全体認識を構成する仕方である。古くより哲學に應用されてスピノサはこの方法によつて「倫理學」の大組織を作り上げたのである。自然主義的ヒウマニズムの經驗主義的認識論の立場からみると合理主義の前提となつている命題と終結とは共に經驗的檢証を得なければならぬ。このような性格をもつとすれば概念の整合という点にこの種の認識は意味をもつことを認めなければならぬ。宗教經驗と他の諸經驗との關連整合は、合理主義によつてできることである。

宗教認識を確立する四つの認識方法に就いて自然主義的ヒウマニズムの批判に基いて更に之を再批判したのである。最後に認識手段としての近代科學的方法が擧げられる。この方法は正確なる觀察と實驗によつて經驗的實証を得んとする。近代自然科學がこの方法の適用によつて偉大なる成果を擧げたのでこの根本精神を哲學宗教の研究にも適用せんとするのである。自然主義的ヒウマニズムは近代科學的方法を最も重んじているのであるが、他の四つの認識方法の取扱ふ資料も近代科學的方法の正確なる觀察の資料に加へ、他の方法の成果を實驗にまで持出し得るものは何等の形で驗証するという試みをなすことによつて超自然現象として自然主義的ヒウマニズムの排斥する宗教經驗が眞に科學的に取扱はれることになると思ふ。

四

最後に自然主義的ヒウマニズムの倫理とそれが超自然的倫理たる宗教道徳をどのように批判しているかを吟味してこの稿を終りたい。ヒウマニズム (Humanism) は *human-Teigism* 即ち人間である主義という意味である。いかなるときにも、又いかなる境遇にあつても常に人間であり、人間の利益になるように骨折ることを主義とするのである。我々の人生はたゞ一度限りのものであるから、これを最も有効に活かし、その中であつて創造的活動を營み、幸福をたのしむべきである。人間の幸福は超自然的源泉からは認められ又は支持を得て正當とされる必要はなく、それ自身で充分に正當性をもつものである。超自然

的源泉は神という風に普通には考へられているが、そんなものは存在しない。人間は自分の知性と他人と協同することによつて、この地上に平和と美の殿堂を築くことができる。人間自身の理性と諸努力が人間の最良にして、しかも唯一の希望である。現代のような混亂と不統一の時代には往々にして精神的な補償や慰安を超自然的領域に求め勝ちであるが、これは敗戦主義である。我等の住家は地上の世界以外にはない。地上以外に幸福とその達成を求めても無駄である。我等人間は自己の運命と約束の土地とを此の地、この現在に求めなければならぬ。未來とは永久に享樂を繼續する場所である。というように自然主義的ヒウマニズムは説くのである。ヒウマニストにとつては人間の行動と思维の主なる目的は人間の幸福と繁榮とを今よりも大ならしめるために、この地上の人間の利益を増進せしめんために行うのである。「この世に於いて人間への奉仕」を生活の標語とする。この思想と殆んど全然對蹠的なのは傳統的宗教の道德思想である。ここではこの世の幸福と繁榮とが目的でなく、來世に於ける個人の救済と、カルビンと説く「神の榮光」のためである。たつた一度の人生という賜物を自由に乗しく美しく華かに享樂するためであるのでなく、超自然的なる報酬と刑罰とを望んで現在に於いて未來のための準備をするために生きていると云われている。自然主義的ヒウマニズムの倫理は徹頭徹尾現世を肯定する倫理であるが、反之傳統的宗教倫理は徹頭徹尾神を肯定する倫理である。

自然主義的ヒウマニズムの人生倫理には心身一元的心理學が重要な

る役割を演じている。人間と身体と人格との生ける統一体をなし、精神的感情的身体的諸作用の相互統一体であつて、一を他から分離して考へることはできない。しかるに傳統的宗教の人生倫理は心身の二元的心理學に基づいているために人間を精神と身体の鬭争の場合と考へ精神と精神的價值を身体とその價值よりも重く考へる。従つて前者は現世に對して積極的肯定的となるが後者は消極的否定的となり勝ちである。傳統的宗教では心の純潔と清淨とを保つためには、正常な衝動を抑壓し否定して死後の生活に備える。又超自然的權威によつて示される諸價值が、我々の實際生活から産み出される自然的一時的諸價值よりも遙かに尊重される。そこで自然主義的ヒウマニズムは現世的享樂を力説して禁慾的他界的倫理を非難し、現在の幸福を死後に延期するのは、現實の社會的不正に默從する敗戦主義者であるとし、一九三二年ピウス十一世の回教を極力排撃する。傳統的宗教倫理はカトリック神學の倫理許りでなく、プロテスタント主義キリスト教のピユリタン主義倫理も矢張りその範疇に含まれる。ヒウマニズムはピユリタン主義の倫理には人間の快樂慾望に對して一種の偏見がある。圓滿なる人格をつくるには、男女共に身心の深處にある感情慾望を發達完成させることが本質的に大切である。正常なる慾望を輕蔑し抑壓すれば遂には密かに野卑異常なる状態で之を満足せんとするに到る。人間の慾望を無拘束に満足させることは社會に害を産む第一原因となるが、社會的に有益なる目的へ人間的慾望を理性によつて善導することが大切である。實に慾望が個人及び集團の業績を生ずる元動力であると考へて

いる。

かくして自然主義的ヒウマニズムは道德といふものは目的から考へても適用の方面からみても優れて社會的なるものと考へる。個人の日常些細な行爲の多くのものは社會的意義がない。有意義な人間の行爲は悉く社會的である。倫理の語源エトスは慣習・風習を意味したのである。道德的價值と基準は個人と個人との相互關係、個人と集團との相互關係、集團と集團との相互關係のうちにある。社會的善の實現が道德の目標であるという。

自然主義的ヒウマニズムの立場ではそれ自体に善悪はない。ある行爲の善悪はそれが個人及び社會に對する結果の如何によつて判定する。その結果も人間の經驗から生じ又その中で吟味され得るものでなければならぬ。ある觀念或ひは假定は、具体的に生ずる諸結果の検討と評價とに基づいてその善としての認識價值が算出されると。正邪についても直接なる認識はない。ただ一日道德の規定が確立し又それが採擇されるとその後は直接的となる。又判定に當つては理性と科學的方法が絶對的であつて、超自然的なるものに依つてはならない。

一般に傳統的超自然的宗教では啓示に基づき神に信頼を置くが理性には信頼しない。理性によつて道德的眞理に到達し得る確信を與へたのはアリストテレスとスピノザであつた。

自然主義的ヒウマニズムは過去の道德的眞理を悉く理性によつて吟味し、現在の光の下でこれを評價せんとする。道德律は歴史的文化的影響をうけているので相對的である。相對的という意味は主觀性とい

う意味でなく、行爲の道德的評價は條件が變じ、時代の變化によつて變化し、學問的發見等によつて大きく影響するという意味である。人間の經驗の智慧の結晶である道德律の機能はどんな環境に於いても正しい行爲の絶對的規則を與へることではなく、或る個人の置かれた特殊の狀況下で何が善、何が悪であるかという判斷をなすに役立つ立場や手段を與へることである。

習慣の形成は道德的生活にとつて大切であるが余りに型にはまり過ぎたり硬過ぎたりしてはならない。最高の道德的義務はしばしば古くなつた過去の道德を追放しなければならぬことがある。従つてヒウマニストは十誠其他の道德訓をそのまま不可變の普遍的法則と考へないし又過去及び現在に於いて認められていない道德的權威に權威なる故に服従しようとしなくて科學的方法によつて検討し理性の自由の働くように余地を残さねばならない。しかし又場合によつては我々の行爲は理性の判斷に基き「合理的自己拘束」をうけねばならない。

自然主義的ヒウマニズムにとつては道德的自由というのは選擇の自由という意味である。あることを欲する行動を多數の過程から選ぶことを意味し道德の領域の中心的課題である。道德的決定を行ふに二つの類型が考へられる。一つは手段と目的との關係による。傳統的宗教では地上の生活を天に於ける祝福といふ最高の目的に對する單なる手段、苦難な巡禮と考へてあらゆるものをこの目的に従はせる。かくて極端なる未來崇拜となり、現在につかみ得る幸福とその機會とを失ふようになる。人間の幸福は未來の領域になく現在「今」の領域にある

と論じて目的と手段との關係から傳統的宗教道德を排撃する。第二の選擇の自由が行はれるのは動機と行爲との關係に於ける場面である。自然主義的ヒウマニズムは特に動機を課題とし「人間の動機の變形と社會化」(The transformation and socialization of human motives)を主張している。動機を科學的に研究した結果は、人の性格は本質的には善でも悪でもなく、利己的でも利他的でもなく又好戰的でも平和的でもない。キリスト教の説く原罪でもなく性悪でもない。人間性は本質的に曲げ易く教育し得るものである。そこで動機を鑄又は鑄直すことができる。傳統的キリスト教では天に於ける報酬を地上に於ける行動の動機としているが之は利己的思想であるとヒウマニズムは非難するのである。

最後に性道德と幸福について自然主義的ヒウマニズムはどう考へているか。傳統的宗教思想によると人は原罪と遺傳的邪惡に充ちたものである。特に人に於ける性の衝動は本質的にいやしく且惡であると考へている。子孫に惡が傳るのは生殖行爲を通じてであると考へる。そこで基督教神學でイエス・キリストの神聖を確保するために、イエスは普通の生物學法則とは違つた生れ方をして生れたといふ神學説を打立てた。それが處女降誕説であると解釋し、キリスト教の影響するところでは不道德と不正なる性行爲が同一視されるようになった。自然主義的ヒウマニズムは、兩性間の諸關係に高い基準のたてられることを要請するが性感情それ自体を決して惡と考へない。政治・經濟と並んで性生活の重要性を認めている。

又幸福については主觀的要素と客觀的要素とがある。客觀的要素というのは事情及び運命であり、主觀的要素とはそれに對する肯定的な感受性を指す。客觀的意味の幸福は價值から言へば、純粹に物及び事情價值であるが、これに「愉快なもの、望ましいもの、目的の到達、成功、幸福な偶然」等が屬している。主觀的意味の幸福は内的な價值で純粹に心の状態に伴う價值である。快感満足、喜び、淨樂及び無限に多様な價值關與もこの種の幸福である。傳統的基督教は、古代の幸福主義が幸福な人の内的態度に重点をおいて、外的運命より獨立を主張したように、心の状態に重きを置いていた。自然主義的ヒウマニズムは之に反し客觀的要素を多分に顧慮する。即ち人間の幸福は結局は主觀的であるかもしれないが、客觀的要素も考へなければならぬ。先づ幸福の客觀的條件は健康である。健康であらうとすれば、最少條件として良い食物・住居・充分な衣服、適當な醫藥品、体操と慰安が必要である。若し今日幾百万人の勞働者に對して以上の最少條件が許されてあつたならば、世界の經濟機構は今とはずつと違つていたと考へられる。それではどうすればこの最少條件が可能になるだらうか。政策としては經濟的抑壓を除くこと、多量失業者の救濟、生活の一般的基本準の確立、勞働時間の減少、休養の延長、計劃的經濟を行ふことである。多くの個人的人格的犠牲が少いほどその社會は進歩したものであり、そこに住む個人は私利と自己の發展を動機とする社會よりも住み易いと説いている。

このように自然主義的ヒウマニズムは「社會的善」を至上の道德目

標とする。しかし社會的善は論理的手段によつて同意を獲得しうる性質のものでない。數學のように証明し得るものでもない。自然科学に於いて自然の齊一性を假定するように倫理的假定である。自然主義的ヒウマニズムはこの假定をすべての人が採用せんことを勧告している。このために人々が凡ての人々の幸福のために働くようにし、集團の善を絶えず考へるようによつて友情とか協同の徳を重んずるのである。社會的善の實現に努力する個人の多くある社會は自己の利益と發展とを行動の動機とする社會よりも多くの幸福と進歩とを將來するだらうと自然主義的ヒウマニズムは考へている。その理由とするところは(一)眞に協同的で社會的意識をもつている個人からなる社會は人類の幸福と進歩の基礎をなす高次の物質的文化的水準に到達しこれを維持することが可能と考へられ、(二)このような社會でこそ人間性の根本的なアリストテレスの所謂「政治的動物」である人間のもつている社會性をもつとも深く満足され、(三)にこのような社會的目標に向つて忠實であつて、人間生活の間に始めて安定と調和とをもたらすことができ宗教的な希望社會よりも遙かに實現性のあるものだと考へてゐる。

以上自然主義的ヒウマニズムが超自然的要素をもつ宗教哲學思想に反對する主なる点を挙げたのである。一々に亘つて検討せねばならぬが紙面の都合により割愛し、一般的な点を一、二とり上げて考へて見たい。まづ自然主義的ヒウマニズムの自然道徳は人間の能力に重点を置いている。人間が自分自身の力をもつて服従し得る所の道徳律を

打立てようとする。ここに宗教道徳からみるともつとも根本的謬りがあると考へられる。それは實在から謬つて人を獨立さすこと、自己を正當とし、人をして自己充滿の感じを聯想させる。眞の實在から人間が獨立するところに罪と不幸との本質があると宗教道徳は常に警告するのである。この警告は近代文化の本質に對して發せられた重大なるものゝ一つであると考へられる。(一)に自然道徳からは首尾一貫した道徳組織を打立て得ないと考へられる。常に義務と善、自由と必然、個人主義と普遍主義、存在と當爲という對立をまぬかれない。どんなに精神化されても幾分かの自己が残り、これが眞實在に對して獨立を主張する限り、自己の力で自己を克服せんとする限り結局は自己の破壊になるのではないかと考へられる。(二)自然主義ヒウマニズは現實の諸事實を尊重することを本旨すると稱しながら、經驗の一樣相である宗教體驗を顧慮すること余りに少いことである。彼等が宗教を非難する資料は宗教の第二次的領域に屬する教説に關するものが主であつて、それが源である宗教體驗自体の意義に就いては論ぜられてない。宗教に於いては體驗それ自体の云うところに先づ耳を傾けることが要求されねばならない。